

表紙によせて

ヒメサザンカ *Camellia lutchuensis* T. Ito

絵:角田葉子(2007年3月)

奄美大島から沖縄本島を経て、石垣島と西表島までの照葉樹林中に自生するツバキ科、ツバキ属の一種で、種小名のルキュエンシスは「琉球産の」という意味である。

花は直径 2～3cm と小型で、花弁の背面先端に少し紅色が入るが内面は白色。花には短い花柄があるので、チャノキの花のように下向きに咲くことが多い。自生地では 1～2 月に開花し、花に芳香がある。葉も長さ 3cm 前後と小型であるが、樹高は現地では 6～7m になる。

同じツバキの仲間では日本原産のヤブツバキ、ユキツバキ、サザンカには多数の品種があって、世界でも重要な園芸植物となっているが、ヒメサザンカは自生地が西南諸島に限られ、花も小型であったため、最近まで園芸的にはまったく意識されなかった。それが、近年になって（といっても 40 年ほど前からであるが）世界のツバキ界で本種が一躍注目されるようになった。それは本種がもつ花の香りのためであった。

ツバキの園芸種は花に香りがないのが普通であるが、バラなどのようにツバキの花に芳香をもたせるための育種親として本種が使われはじめたのである。1968 年に、ユキツバキに本種を交配した雑種が 'Fragrant Pink' と命名されて米国から発表され、香りツバキとして注目を集めた。

それから約 40 年、今日ではこのヒメサザンカを片親とした多くの雑種に優雅な品種名がつけられて出まわっている。このときのもう一方の親には、花が大きくて、花型も多彩で、寒さに強い日本原産のヤブツバキの品種が使われることが多い。しかし、ヒメサザンカの花は小さいので、できた雑種のほとんどが花径 4～5cm の小輪になる。一方で、葉も小型で、枝上に多数の花を群がって着けることや、それよりも第一の目的である花の芳香が伝わるので、最近では芳香ツバキとして広く出まわってきた。 (箱田直紀)